

作成日	2019 年 7 月 5 日
学科・専攻名	文学研究科史学専攻

教育課程・学習成果

1. 教育課程編成・実施の方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していますか。

【現状説明】

博士前期課程では学士課程での学修を基礎として、高度な専門性を身につけることのできる教育課程を体系的に編成している。授業科目は特論（講義系科目）と演習とから成り立っているが、特論とほぼ同等の数の演習を配置することで、学士課程以上のアクティブ・ラーニングを行って、高い専門性と研究手法を体得し、修士論文を完成させられるような教育課程を体系的に編成している。博士後期課程においては、特論と演習を融合させた特殊研究と研究指導が開設され、より高度な研究によって博士論文を執筆させる編成となっている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

2. 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置を講じていますか。

【現状説明】

本専攻では、演習だけでなく特論科目でも少人数授業を行い、学生の主体的参加を促すよう工夫している。また、博士前期だけでなく後期の院生も参加して、卒業論文発表会、年 2 回の例会（日々の研究についての発表会）、修士論文中間発表会を実施し、相互の研究テーマについて理解を深めると同時に、研究内容の深化に努めている。なお、院生は TA として、授業準備や学部生・博士前期課程学生の指導補助を行うことで自らの学修到達度の確認と指導スキルの向上を図る制度があり、効果を上げている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

卒業論文発表会、年 2 回の例会、修士論文中間発表会に学部学生の参加も促し、学部と大学院のより強い連携を図る。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

3. 学生の学修成果を把握し、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価を行っていますか。また、その結果をもとに教育の質向上に向けた取り組みを行っていますか。

【現状説明】

教育課程及びその内容、方法の適切性については、専攻会議において、教育成果資料（大学院生アンケート、学生生活実態調査、教学 IR データ等）の結果を参考に検証している。特に、成績の低い院生の状況については重点的に調査し、対応策を検討している。また、毎年度、次年度の時間割を作成する際に、各科目の受講者数の確認、カリキュラムの妥当性、担当者の選定などを専攻会議で検証している。その他の改善に結びつける取り組みとしては、全学 FD・SD 講演会、学部の FD 研究会、FD 交流会（事例発表）、公開授業への参加、学外の FD 関連研修・講演会への個別参加等を通して行っている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

学部生との共通科目について、大学院においてより専門性の高い授業を行うため、廃止を含めて位置づけを再検討し、今年度での廃止することとした。

教員・教員組織、FD**1. 教員組織の編成(募集・採用・昇任等)にあたって、職位構成および年齢構成の偏りに配慮した編成をおこなっていますか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっていますか。****【現状説明】**

2018 年度開始時の教員組織は、50 代後半～70 代が全体の約 40%であり、40 代も 35%を占めるものの若干の偏りを示しているため、退職教員の補充にあたっては、年齢層の引き下げを目指す。職位構成は教授 9 名、准教授 3 名である。博士前期課程・後期課程の史学専攻全体の視点から見ると、円滑な授業実施・学生指導のために日本史・東洋史・西洋史各領域に 2～3 名の教授資格者は不可欠であるため妥当なところである。カリキュラムとの関連については、ポリシーを踏まえ、日本史・東洋史・西洋史で構成されるカリキュラムに対し、各領域ともに古代史から近現代史まで各時代を専門とする教員を満遍なく配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

東洋史領域は、教員 1 名が 2018 年度に急逝し、大学院運営に支障をきたしているため、早急に後任を補充する。

2. 学科・専攻独自の FD 活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか。**【現状説明】**

2018 年度は専攻独自 FD として、近年増加傾向にある、さまざまな点で学習に困難を抱える学生に対して、どのような授業をするのが有効なのか、教員間で具体的事例を出しつつ意見交換し(毎月 2 回程度)、その結果を実際の学生指導に反映させた。こうした専攻独自 FD 活動には、毎回、全員(会議や病気等でやむなく欠席の場合を除く)が参加した。教育活動(授業内容の充実度や履修指導等)に対する学生の満足度については、「授業アンケート」や「学生生活実態調査」を基に、専攻会議で検証している。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

内部評価委員会からの評価結果（内部評価結果レポート）

一般的なコメント（総評）
<ul style="list-style-type: none"> 一部を除いて、おおむね現状説明も具体的になされており、問題点も的確に認識されています。 教員組織における後補充については、進捗を次年度に報告してください。
改善勧告コメント（具体的な改善の指示）
<ul style="list-style-type: none"> 学部生との共通科目の今後については、位置づけを再検討すると指摘されていますが、現状での考え方、あるいは改善に向けたタイムスケジュールなどを具体的に示してください。

内部評価結果レポートの改善勧告コメントに対する点検単位の意見

意見
学部生との共通科目については、専攻内で位置づけを再検討し、次年度を最後に廃止と決定した。